



「あけましておめでとうございます」

「令和6年が良い年であるように」と願っています。戦争や紛争、貧困や災害がこの地球からなくなりますように・・・。

令和5年は、子どもたちにとってどんな年だったのでしょうか。令和2年、3年、4年とコロナ禍でいろいろなことが制約され、なかなか自由な活動ができない大変な年でしたが、令和5年は、ほぼ制約がなくなり、コロナ禍ではできなかった活動もできるようになり、学校では、教室や校庭で元気な子どもの声が聞こえるようになりました。学校は、やがて社会に出て自分の夢や使命を実現させるための力をつける場で、子どもたちにとって大切な学び舎なのです。

地域には、朝早くから、子どもの見守りや交通指導をしておられる方がたくさんおられます。本当にありがたいことです。私たち大人は、子どもを守り、育てていく責任があります。「子どもは地域の宝」です。

## 生きること

相田みつをさんの言葉から、「生きること」について考えてみましょう。

自分の番 父と母で二人 父と母の両親で四人 そのまた両親で八人 こうしてかぞえてゆくと 十代前で一、〇二四人 二十代前では なんと百万人を 越すんです 過去無量のいのちの バトンを受けついで いまここに自分の番を 生きている それがあなたのいのちです それがわたしの いのちです みつを	
---	--

現代は、世界で戦争や紛争、各地で地球温暖化による災害が起きるなど、人類にとって生きにくい時代となっています。特に、繊細な感情を持つ子どもにとっては大人以上に生きにくい時代なのでしょう。

「死にたい」と訴えたり、リストカットしたりする子どもたちが増えているということを知り、本当に気になります。子どもには自分の将来に向けて夢を持ち、自己実現に向けてたくましく生きていってほしいものです。そして、子どもがそのように生きていけるような社会の実現をしていくことが私たち大人の責務なのではないでしょうか。

生きること悩むことは誰にでもあることだと思います。悩みは人を成長させる大切な要素です。悩みはあってもいいことなのでしょう。でも、子どもが悩みで「死」を考えることはあってはならないことなのです。

「自分の番」を読んで、「命をつなぐことの大切さ」について家族で話し合ってみませんか。「辛いことがあっても生き続ける勇気と元気」がもらえるはずです。